

トニ・モリスンと黒人共同体

太田まり子

トニ・モリスンと黒人共同体

太田まり子

トニ・モリスン(1931～)は、アメリカの黒人の歴史や生活そして内面を、豊かな感受性をたたえた文章にのせて描き続けている女性作家である。モリスンがこれまで発表した小説は、『青い眼がほしい』(1970年)、『スーラ』(1973年)、『ソロモンの歌』(1977年)、『タール・ベイビー』(1981年)、『ピラウド』(1987年)、『ジャズ』(1992年)である。これらの小説は、奴隷制度およびその後も続く黒人差別を鋭く告発し、さらには白人の美意識の支配に対しても告発の目を向けるものである。また人生への深い洞察に満ち、黒人たちと彼らの生活への愛情に貫かれている。彼女の小説はこのような明確なメッセージを伝えている。同時に、読者を引き付けて離さない巧みなストーリーの展開と、鮮やかな比喩や象徴的な表現^(註1)に彩られた文章は、文学を読む喜びをあらためて教えてくれる。辛酸を極める痛ましい黒人の歴史や精神の苦痛は、このような優れた入れ物に入れられてこそ、世界の多くの読者の深い共感を得ることができるといえよう。

トニ・モリスンの小説のなかで重要な役割を果たしている要素のひとつは、黒人の共同体である。アメリカでは奴隷制度廃止後も、白人の社会から排除された黒人の集団が、人種共同体とでも呼べる集落や黒人街として各地に残り、それらは今日にまで続いている。そのような黒人の集落や街がモリスンの小説の主要な舞台となっている。モリスンの小説に出てくるそのような共同体は、さまざまな性格をもち、作品中で果たす役割もいろいろであるが、モリスンの小説世界にとってこうした共同体は決定的な意味をもっていると思われるので、この黒人たちの共同体の諸側面を考えていきたい。

この小論では、『青い眼がほしい』『ピラウド』『ジャズ』の三作をとりあげる。この三つの小説は非常に強い類似性をもっている。いずれの小説においても、主人公たちは黒人としての苦しい体験や心の傷をもち、あがきながら生きている。そうした者たちを救おうと、まわりの黒人の女たち(少

女たち)は祈り,あるいは励ます。だが三つの小説での共同体のありようは同じではない。また女たちの祈りの重要性の度合いもさまざまである。『青い眼がほしい』では,少女たちの懸命な祈りにもかかわらず主人公は悲惨な結末へと押し流されていく。『ピラウド』と『ジャズ』では,主人公たちは共同体の女たちの祈りや支援の中で苦しみを乗り越えて生きていこうとする。そのような登場人物の生にとって,登場人物をとりまく共同体のありようが重要な要素となっている。これらの三つの作品の中の共同体を比較することによって,モリスンの創作意図の変化あるいは深化を探り,またなぜ共同体の担い手が「女たち」なのかをも考えていきたい。

(1) 『青い眼がほしい』の場合

モリスンの第1作の『青い眼がほしい』は,1940年から41年のオハイオ州ロレイン市を舞台にしている。(ちなみにこの都市でモリスン自身が生まれ育っている。)ロレインはアメリカ北部の製鉄所のある都市で,この小説には白人たちの住む湖畔の美しい家並みの地区と,製鉄所に近いうす汚れた家々の地区が描かれている。後者の地区はアメリカの各地から集まってきた人々,主に黒人の居住区で,その街がこの物語の主舞台となっている。

貧しい黒人の家庭に育ったピコーラは,醜いというより,「醜さを身につけているような」女の子だ。汚い裂けた服,手入れしていない髪,そして自分は醜いと思い込んでいるピコーラの姿は,常にみじめさをにじませている。母は白人家庭のメイドをしていて家のことを顧みず,父は飲んだくれで,この夫婦には喧嘩が絶えない。その激しい喧嘩を目にすると,ピコーラは「消えてしまいたい」と思う。ピコーラは幼いころから青い眼に強いあこがれをもって,自分の眼が青かったら,父と母は喧嘩ばかりしていないで,自分を可愛がってくれるだろうと思っている。

ある日ピコーラはクローディアとフリーダの姉妹の家にやってくる。ピコーラの父が自分の家に火をつけて刑務所に入り,母は仕事に行ったきりなので,クローディアたちの母がピコーラをあずかることになったのだ。やはり貧しい黒人家庭をきりもりしているクローディアの母は,ピコーラが牛乳をたくさん飲んだと文句を言いながらも,ピコーラが初潮を迎えると,やさしくかいがいしく始末をしてくれる。そこには,仕事にかまけて子どもを放りっぱなしの実の母に代って,数日とはいえいわば母代りをし

てくれる隣人の姿がある。またピコーラは、ピコーラ一家が間借りしている家の2階に住む売春婦たちを訪れてしばしば楽しい会話に加わる。この女たちもピコーラをかわいがってくれている。クローディア姉妹は、家にやってきたピコーラに、みじめな思いをさせまいと一生懸命努力するし、ピコーラが男の子たちにいじめられたときには、体をはって味方をする。白人の血のまじった肌の色の薄い、金持ちの女の子がピコーラをいじめたときには、自分のことのように怒り、その女の子を大声でなじる。

ある夜ピコーラは父にレイプされ、妊娠する。そのときピコーラは12歳かそこら。父はどこかに逃げてしまい、ピコーラは学校を辞めさせられる。ピコーラの妊娠が知れると、街の女たちは「赤ん坊が死んじゃえば、あの子は幸せよ。二本足で歩くものうちじゃ、いちばん醜いものになるにきまってるからね」「手のほどこしようがないやね。法則があるはずだと思うよ、二人の醜い人間があんなふうにつるんだら、もっと醜い子が生まれるっていう法則がさ。だから、墓場に入ったほうが幸せね」⁽¹²⁾と語り合う。わが子を犯すという行為は許されない行為であり、それを犯した男は醜い者の典型だ。お腹の子どもは為すべからざる醜い行為の結果だ。街の女たちはピコーラをタブーを犯した共犯者とみなすだけで、その苦しみに思いをはせて同情することを忘れてしまう。

クローディアとその姉は、ピコーラのお腹の子が無事に生まれるようにと、自分たちの一番大事にしている物(お金)と花の種を埋めて、祈る。しかし、花は咲かず、ピコーラのお腹の子は早産で死んでしまう。クローディアたちは、お腹の子が死んだのは、自分たちの祈りとおまじないの仕方がまずかったからだ信じ、自分たちの不手際を恥じるあまり、ピコーラと顔をあわせないようにになってしまう。ピコーラは自分の眼が青くなったという奇跡を信じ、自分だけの世界に閉じこもり、精神錯乱の状態となる。

著者モリスンはなぜピコーラの悲劇が起きたのかを、ピコーラの父と母の生い立ちにさかのぼって説き起こしている。ピコーラの父は生まれると同時に両親に見捨てられ、親を知らずに育った。彼は若いころ父を探して会いに行くが、てんで相手にされない。そんな過去があったのだ。娘のピコーラが台所にみじめたらしく立って皿を洗っているのを見た彼は、嫌悪感と同時に愛情を感じる。そのピコーラのしぐさが彼の妻を思わせ、その結果娘をレイプしてしまう。

ピコーラの母は小さいときから足に障害があり、結婚後は映画の中の美

男美女たちにあこがれて、自分の容貌と夫への失望にうち沈み、自分を愛することも家族を愛することも放棄する。そして清潔で裕福な白人家庭に心を奪われ、その家を愛し整えることに自分を捧げている。

またピコーラと母をめぐるこんなエピソードが書かれている。ピコーラが母の手伝いをしに、長い距離を歩いて湖の近くの白人の家を訪れたとき、ピコーラは焼きたてのパイをはずみで台所の床に落としてしまう。そのとき母は「わたしの床」を汚したと言って叱り、やけどをしたらしいピコーラを心配するどころか追い出し、ちょうどそのとき入ってきた白人の少女には愛情のこもった甘い言葉をかけるのだった。この辺りの描写には、ピコーラは自分が白人の女の子だったらと思ったにちがいない、と思わせるものがある。ピコーラが妊娠してからは、母は彼女によけいつらくあたり、折檻しさえする。

ピコーラの悲劇は彼女の両親に起因する悲劇であることはまちがいが無い。また、ピコーラをひどく扱う者や、彼女との接触を通して自己肯定の安心を図る者がこの街にいたこともピコーラの不幸を深刻なものにした。

ピコーラをひどく扱う者の一人がジュニアである。彼は、ピコーラたちの通う学校の隣に住む褐色の肌をした少年だ。ジュニアの母は、教育のある乳褐色の肌の婦人で、自分たち家族は街の汚らしい黒人たちとは違うという意識をもって暮している。彼女は自分の家と生活を、万事こぎれいに整えることに執着し、夫とのセックスの間も髪の毛の乱れを気にする。人間の奔放な感情を危険視している女だ。母から黒人の子どもと遊ぶことを禁じられている息子は、退屈な毎日を送っていて、おのずと弱いものいじめに喜びを見出すようになっていく。ある日、ジュニアは学校から帰ろうとしているピコーラを家に誘い、母のかわいがっている猫とピコーラを部屋に閉じ込める。少したってピコーラになでられた猫が目細めているのを見たジュニアは、猫を振り回して殺し、ちょうどそこに帰ってきた母にピコーラがやったと嘘を言う。その母はピコーラをありったけののしり、追い出す。ここではピコーラの心理が記述されていないが、ピコーラはますます消え入りたいと思っただろう。

もう一人のとんでもない男がこの街にいる。それはソープヘッドと呼ばれる、高等教育を受けた淡褐色の肌の西インド諸島出身の男で、街の人々の悩みを聞き相談に乗って生計を立てている。イギリスの貴族の血を引く厳格な父親のもとで育った混血のこの男は、人間嫌い、特に人間との身

体的接触に嫌悪感をもっている。流れ流れてこの街に住みつき、牧師然として暮している。妊娠して学校を辞めさせられたピコーラは、この男のところに眼を青くしてくださいと頼みにやってくる。ソープヘッドはピコーラに毒をかけた肉を渡し、戸口のところにいる犬に与えるように言う。もし犬の様子が急変したら、神が願いを聞き入れてくれる証だと言う。何も知らないピコーラは、犬の急死に奇跡が起きたと信じる。ソープヘッドは日ごろからこの犬の存在を疎ましく感じていたのだが、手を下しかねていたのだ。ソープヘッドは、自分が少女の願いをかなえてやったこと、奇跡を為したと少女に信じさせることができたことに満足するのだった。

ジュニア少年とその母、そしてソープヘッドの存在は、さまざまな肌の色をしたこの街の黒人がさまざまな意識をもっていることを教えてくれる。それだけでなく、その者たちの生活の矛盾がピコーラとのかかわりで、ピコーラを傷つけ、追いつめる方向に作用する。この街の黒人たちは、共通の意識をもっているわけではなく、一体感のない、ばらばらな存在であるようだ。モリスンの小説に描かれている黒人の共同体の中で、この街はおそらくもっとも共同体らしくない共同体だろう。

そんなネガティブな世界にあって、クローディアとその姉だけが、現実にはピコーラを救うことはできないにせよ、ピコーラを救う視点をもっている。裕福で白い者がなぜ皆からうっとりとした眼差しで見られるのかと、クローディアが怒りをもって語っていることからして、彼女がピコーラの「青い眼への願望」をしりぞける黒人としての誇りをもっていると分かる。しかしクローディアはピコーラよりさらに2歳年下の子どもであり、できることといえば祈ること、おまじないをすることだけだ。また子どもだったからこそ、性に対し無知であり、父娘相姦をタブー視する意識から自由であったといえる。

『青い眼がほしい』の最初の部分でクローディアが次のように語っている。

「でも、わたしたちは、ピコーラの赤ん坊が健康で無事に生まれるようにそればかり祈っていたので、おまじないのことしか頭になかった。種をまいて、それにふさわしい呪文を唱えれば、花が咲いて、なにかもうまくいくというおまじないだ。」^(註3)

そして小説の最後にこう語っている。

「わたしは、わたしが種をあんまり深く埋めすぎたわけではなく、それ

は、わたしたちの町の土と大地のせいだったといういきさつを話してきた。」^(註4)

このように、この小説は彼女たちの祈りが聞きとどけられなかったのはなぜかをめぐって語られている。このことから、この小説では少女たちの祈りが重要なモチーフになっていることが分かる。

一般的に言って、祈りはどのような意味をもっているのだろうか。人が祈るとき、それは祈るしかない状況だからだろう。もし何か行動でできることがあるなら、それをするだろう。何もできないからこそ祈るのであり、それゆえ祈りは切実なものとなる。祈るという行為は非常に強い精神的能動性をもつ行為だ。祈るとき、その者の全精神は祈る対象に注がれている。街の大人たちが、ピコーラの母を含めて誰一人ピコーラの味方をしないと状況の中で、クローディア姉妹は孤立していた。またピコーラのお腹の子どものために友人として具体的にできることは何もなかった。まさに祈るしかない状況だったといえる。彼女たちの思いを表す方法は、祈りしかなかったのだ。

家庭的不幸、白人は美しいという美意識からくる自己否定の気持ち、そして性的な被害というピコーラがしょいこんでいた不幸は、どれも黒人の女性が往々にしてかかえてきた不幸だ。そんなピコーラを救いたいという思いは、モリスン自身の切実な思いであるだろう。その思いはクローディアとその姉に託されるが、この二人の少女たちの祈りは聞き届けられない。街の大人たちの中には、何人かピコーラを暖かく見守っている者もいたが、それも少女の妊娠以前のことであり、他の者はピコーラの悲劇を助長するだけの存在だ。共同体としての共通意識を欠いたこの街は、一人の少女を悲惨な結末へと導いていく。^(註5)

だがここに言う共通意識を、モリスンは描くようになる。その方向を示すのがモリスンの第5作の『ピラウド』だ。

(2) 『ピラウド』の場合

『ピラウド』の舞台は南北戦争前のケンタッキーのスウィートホームという農園。この農園に13歳の女奴隷セスが買われてくる。農園の主人は奴隷たちを怒鳴ったり殴ったりしない、当時としてはきわめて変わり者の白人だ。セスは奴隷としては異例のことだが、農園にいる5人の男の奴隷から

自ら夫を選び、3人の子どもを産み、これも異例だが手元において育てる。しかし農園主が死に、別の男たちが農園を経営するようになると、いっぺんに白人の憎悪が農園を支配する。奴隷たちは逃亡を計画し、それが発覚して、ある者は殺され、ある者は売り飛ばされ、ある者は行方不明になる。身重だったセスはレイプされ、背中がざくざくになるまで鞭で打たれる。セスは先に逃がした3人の子どもを追い、河を渡って逃げる。その途中で女の赤ん坊を出産する。自由州であるオハイオ州のシンシナティの近くに、セスの姑のベビー・サッグスが住んでいる。セスは生まれたばかりの赤ん坊を抱いて、姑の家にやっとのことでたどりつく。

ベビー・サッグスはこの街の黒人たちの中心となっている人物で、ベビーの家には黒人たちが集い、旅人が立ち寄り、伝言が仲介される。ベビーは街の黒人たちをすべて伴って森の開けた場所に行き、説教をする。

「ここ、この場所では、わたしたちは生身の軀。泣き、笑う生身の軀。…それをいつくしめ。強くいつくしめ。あそこでは、あの人々はあなたがたの生身の軀を愛さない。あの人々はそれを軽蔑してる。」^(註6)

彼女はこう語り、踊る。人々は男も女も歌い、踊り、泣く。

セスがベビーの家にやってきて、傷ついた体を癒していると、街の人々が訪れてセスと友人になる。しかし28日目にスウィートホームの農園の白人が保安官を伴ってセスを取り戻しにやってくる。^(註7) その前日、ベビーはセスの歓迎パーティを催していたのだが、そのあまりの豪華さに、街の黒人たちは驚き、怒っていた。追手に気がついた者もいたが、誰もすばやくセスたちに知らようとはしない。農園の白人を見て、セスは子どもを自分と同じ目にあわせまいと、手元にいた赤ん坊を殺してしまう。

刑を終えてセスがもどってくると、ベビーの家には殺された赤ん坊の霊が取りついている。不気味なことが次々に起こる家を、街の黒人はもう訪れようとはしない。ベビーは嫁のしたことにショックを受け、失意の状態のまま亡くなる。

何年かが過ぎ、10代の少年になった二人の息子は幽霊屋敷に嫌気がさして家を去る。セスは、街のレストランで働きながら、ただ一人残った娘デングァーと暮している。

やがて南北戦争も終わり4・5年たったころ、スウィートホームの奴隷の一人だった男ポールDが、18年間の苦しい労働と旅の末、セスを訪ねてやってくる。ポールDは家を徘徊する赤ん坊の霊を追い払う。その直後に

ピラウドと名乗る若い女がどこからともなく現れてセスの家に住みつく。「ピラウド(愛されし者)」は奇しくも赤ん坊の墓の墓碑銘だった。死んだ赤ん坊の幽霊のようでもあるその娘は、ポールDを家から追い払い、セスを我が意のままに奉仕させる。^(註8)セスはピラウドを娘の生き返りと信じ、仕事にも出ないようになり、彼女に奉仕し、懺悔する。セスがげっそりと痩せ、精神的にも限界にさしかかったとき、デンヴァーから事の次第を聞いた街の女たちはセスの家の前に集合し、悪霊を追い払うべく祈る。ピラウドは森に逃げたのか、文字通り消えたのか、ともかく女たちの祈りがきっかけになって、セスの家からいなくなる。セスは再び娘を失った悲しみに床につく。ポールDはもどってきて、セスに自分を大切に生きていこうとさす。

『ピラウド』にでてくるシンシナティーの近郊の街は、黒人たちが白人の憎悪から逃れて集まっている街で、人々はベビーを中心に共通の意識をもって生活している。黒人たちは、セスの歓迎パーティーの豪華さに怒り、追手がセスのところ近くに近づくのを黙って見ていたり、霊の取りついたセスの家に寄り付かないということはあった。しかし、ある混血の婦人はデンヴァーが小さいときに読み書きを教えてくれたし、ピラウドの出現後一家が食うに困ったとき、街の人々は食糧を届けてくれる。そしてセスが悪霊にとりつかれているらしいと知ると、女たちは集合して祈る。^(註9)ピラウドが消えたのち、スウィートホームの生き残りの男ポールDの励ましもあって、セスの立ち直りが示唆されて物語は終わる。

この小説でも共同体の女たちの祈りは重要な意味をもっている。そして、『ピラウド』の祈りは『青い眼がほしい』の祈りよりも大きな力を発揮している。だが、セスを助けるのは、共同体の女たちとポールDだけではなかった。農園から逃亡するとき、セスは臨月の体だった。逃亡中にセスの足の傷を手当てし、出産するのを手伝ったのは、たまたま通りかかった白人の少女だった。また奴隷制度に反対する白人の運動があったからこそ、セスは子殺しの後、極刑を免れたのだった。

これまでみてきたように、セスの住む街は、黒人たちの共通意識に支えられた一体感の強い共同体ではあるが、その共同体の女たちはセスを救う者たちのうちのひとつの力であり、もっとも重要な力とは言えない。それが唯一の重要な力となるのは、『ジャズ』においてである。

(3) 『ジャズ』の場合

モリスンの最新作『ジャズ』は第一次世界大戦後の大都会の中の黒人街を描いている。シティと呼ばれるこの黒人街は「ハーレム病院」が出てくることからして、ニューヨークのハーレムと思われる。ヴァイオレットとジョーの夫婦は大都会への憧れを胸に、1906年にヴァージニア州からシティにやってくる。シティは二人の期待を裏切らない。

やがて20年がたち、50歳になった二人の関係は冷たいものになっている。ジョーは若い娘ドーカスに心を奪われてつきあいはじめ、あげくにドーカスを殺してしまう。ヴァイオレットは夫の裏切りに悩み、ジョーは恋人を失った悲しみに泣きくらす、どうにか二人は立ち直る。そんな二人を街の人々は見守る。

誰もがジョーがやったと知っていた。が、誰もジョーを警察に突き出さない。ドーカスの両親はすでになく、伯母アリスが育てていたのだが、アリスは警察権力への不信もあり、またジョーの悲嘆の深さを聞き知って、それが十分な罰だと考えたゆえに、警察に訴えることはしなかったのだ。そもそもドーカスが死んだのは、救急車が来なかったからだ。要請の電話をしたのが黒人だと知り、電話を受けとった白人は、道路が凍っているという理由で救急車を出さなかったのだ。このことに典型的に現れているように、黒人街の一步外には差別が渦巻いている。しかしここにいれば、過ちを犯したものも、心に傷をもった者もなんとか生きてゆける。ヴァイオレットは夫と若い娘ドーカスのことを、発砲事件があってはじめて知る。そしてドーカスの葬式に駆けつけ、その死顔にナイフで切りつけ、居合わせた人々を驚かせる。「自分の男のために戦おう」としたのだ。苦悩するヴァイオレットは、ドーカスの伯母をたびたび訪れて、ドーカスがどんな娘だったかを話してくれと頼む。はじめは怖がっていた伯母のアリスだったが、次第にうちとける。

1年以上もジョーは仕事にも出ず泣いてばかりいるが、その間ヴァイオレットは以前のように無資格の出張美容師を続けて細々と生計を立てる。得意客は減るものの、街の囲い者の女たちはヴァイオレットに髪を整えてもらい、話を聞いてやり、チップを与える。街の教会の女性クラブでは、援助を必要としている者の候補者としてヴァイオレットをあげる。しかし、

火事で焼け出された、より緊急性のある者のほうに援助を与えることが決定される。ヴァイオレットが必要としているのは祈りのほうだと思ふ会員が多かったのだ。

「いま彼女を助けることができるのは、お金じゃなくて、お祈りだけだから。…問題をつきつめてどういうふうに解決するかは、ヴァイオレット一人の才覚にまかせることにしたの。」^(註10)

というわけである。きっと女たちは彼女のために祈ったにちがいない。もともとこの街の女たちには助け合いの精神があり、寄り集まって、手作りの昼食を食べながら慈善の行事の話し合いをしたりしている。

ヴァイオレットとジョーが立ち直るためには、自分の過去をそれぞれが顧みて、心の奥底にある渴望を見つめなくてはならなかった。ヴァイオレットは知らず知らずに、幼いころ話に聞いた男の子のことを心の奥で追い求めていた。それは、ヴァージニアにいたころヴァイオレットの父が出奔した後でめんどどうをみにやってくる来てくれた祖母が繰り返し話した、白い肌の金色の髪の子の男の子のことだ。その後苦しい生活の中で母は自殺し、少女ヴァイオレットの空虚な心をかろうじて潤したのが、見たこともない金髪の子の男の子の姿だったのだ。ヴァイオレットは夫を愛したと思っていたが、実はその子の残像を愛していたと気づく。ヴァイオレットが絶望の底から自分の過去を振り返る過程で、彼女にはドーカスの伯母アリスの居間と彼女との語らいが必要だった。そのアリスも夫に去られるという、黒人の女にありがちなつらい過去をもっていた。アリスは手元に残っているものを大事にしなさいとヴァイオレットを励ます。またアリスの側も、ヴァイオレットの訪問を心待ちにするようになり、唯一の身寄りだった姪を失った悲しさと怒りを、加害者の妻との語らいで癒してゆく。

一方若い恋人を撃ったジョーは、母が誰だか分からないまま子どもの時期をすごした。自然をねぐらにしている野生の女が母だと聞かされ、一度ならず確かめに行くが、精神の尋常でない母からは何の反応も得られなかったという過去があった。そのジョーの心のすきまを埋めてくれたのが恋人のドーカスであったが、愛する者を自分につなぎとめておく方法として、殺すことしか知らなかった彼は、他の男と踊る彼女に向かって発砲したのだ。

ジョーが立ち直るためには、ドーカスの女友達のフェリスが家を訪れてドーカスの最期の様子を話してくれることが必要だった。フェリスは、ヴァ

イオレットとジョーが過去と向き合って真剣に悩む姿に共感をおぼえ、繰り返し二人を訪れる。その過程でフェリスも自分の母親に感じていたわだかまりを解消していく。フェリスは白人の店から指輪を盗んだ母のことを、どう考えればいいのか分からずにいたのだが、母のことを誇りに思う気持ちになっていく。何度目かにフェリスが訪れたとき、ヴァイオレットとジョーは、事件の後逃がしてしまった小鳥をまた飼おうと話し合い、二人で踊りを踊るのだった。ヴァイオレットはアリスと、ジョーはフェリスと話し合い、自分を見つめることによって心の傷を癒し、なんとかこれからも二人でやっていこうという前向きの気持ちになる。二人は自分たち夫婦の間に欠けていた本当の愛に気づいたのだろう。

このように『ジャズ』では、悲しみ悩んでいた夫婦を、街すなわち黒人の共同体がやさしく包み、女たちの励ましや語らいが夫婦の立ち直りを支援する様子が描かれている。その女たちも多かれ少なかれ悩みや苦しみを抱えていて、夫婦との交流で彼女たち自身も癒され、励まされる。主要な登場人物の、明日に向かって生きていく様子が示唆されて物語は終わっている。これまで見てきた3作の中では、『ジャズ』において黒人の共同体の姿がもっともポジティブに描かれている。

(4) モリスンの描く共同体

これまでモリスンの『青い眼がほしい』『ピラウド』『ジャズ』を、主人公たちと共同体との関わりに着目しながらみてきた。

第一作目の『青い眼がほしい』でのクローディアたちの友人を救おうとする切実な祈りは、『ピラウド』では街の女たちによって担われている。最新作の『ジャズ』では黒人街の女たちが担っている。

『青い眼がほしい』のピコーラの心は孤立無援のまま非現実の世界にさまようが、『ピラウド』と『ジャズ』では共同体の女たちが窮地にある者を救ってくれる。

『青い眼がほしい』ではたった二人の少女の祈りとして表現されているものが、後の二つの作品ではいわば共同体の精神へと拡大しているといえる。

『青い眼がほしい』では少女たちはひっそりと陰ながら祈るしかなかったが、『ピラウド』では女たちは実際にセスの家の前に集合し、大勢で祈

る。『ジャズ』では女たちは苦しむ者の話を聞いてやり、自分の体験や悩みを語り、励まし、仕事とチップを与え、また皆で見守り祈っている。

モリスンの共同体の描き方には、このような変化をみることができる。つまり、共同体の女たちの活躍は、作品を追うごとに増していき、頼りになる存在として小説中に描かれるようになってきている。黒人としての苦しさを、人と人とのつながりを通して乗り越えていこうというモリスンのメッセージが、明確になってきているといえる。

この変化あるいは深まりは、「祈り」から「行為」へと要約できるかもしれない。事実、最新作の『ジャズ』では祈りのモチーフの影が薄くなっている。女たちの祈りについては、教会の女たちの考えとして、たった1行か2行書かれているだけだ。祈りの重要性が減った分、女たちは励ましや語らいなどの具体的な行動をしている。

「行為」の重みが増してくることに密接に関連していることだが、モリスンの描く共同体は、作品を追うごとに、苦しむ者にとって暖かいものとなっている。『青い眼がほしい』の街には、ピコーラを思いやる女たちもいるが、住民には連帯感が欠けていて、共同体としての求心力が感じられない。人々はばらばらな思いをかかえて暮している。黒人としての誇りを持ち、支えあって生きていこうという共同体の精神が欠如している。クロウディアたちだけがその精神をもっている。

このように、モリスンの描く共同体の精神は深まりを示しているのだが、その精神の担い手がいずれの場合も女たちであるという点も注目に値する。では、黒人共同体の精神を担うのがなぜ女たちなのかを考えてみよう。第一には『青い眼がほしい』の場合のように、黒人同胞に対する熱い思いがモリスン自身のものであるため、祈り、手をさしのべる登場人物がおのずと女性になるということがあると思う。第二には、モリスンの小説には、家族や村、街を捨てて出奔する男がよく出てくる。逃げだす男たち、共同体を支える女たちという構図は、モリスンが実際に見聞きした多くの事実から得たものであるのかもしれない。第三には、女性の方がより苦しんできたということがあるだろう。子を産み、育て、家庭の雑事を往々にして主に担う女性、社会的には活躍の場を男性に奪われてきた女性が、苦しむ者を救う者としてより期待できるという考えがモリスンにあるのかもしれない。さらに、女性の苦しみはデリケートな部分にもわたる。見た目が問題にされてきた女性は、白い肌、青い眼、なめらかな金髪という白人の美

の基準によって、より深く自己否定の念を抱かされてきたといえよう。また性の被害にあって苦しむのは女性の方が多く、深刻さも甚大であるだろう。そのような、より苦しんできた女性こそが、苦しむ者のより深い理解者でありえるという考えはまっとうなものと思える。

黒人のために黒人のことを書き続けるモリスンの小説には、この小論で述べた「祈り、手をさしのべる女たち」という側面以外にも、まざまな性格をもった黒人共同体が登場する。黒人の共同体のもつネガティブな側面にもモリスンはもちろん目を注いでいる。そのような諸側面の考察は次の機会にゆずらなければならない。それにしても、この小論に述べた側面だけでも、黒人たちの共同体の描写は、それ自身興味を引かれるものであるが、同時に、黒人でない読者にも、自らの属する共同体（都会に住む者にとっては家庭だけかもしれない）のことや、人と人とのつながりについてあらためて考えさせるものである。そのことから、モリスンはすぐれて普遍的な文学の創作者といえるだろう。（未完）

注

- (注1) ここに象徴的な表現というのは、例えば『ピラウド』の中にある「背中に生えた木」という表現などをイメージしている。この小説を読み進んでいくと、その表現の意味は、ひどく鞭打たれた背中への傷跡を示すものだと読み解けるようになっていく。
- (注2) Toni Morrison, "The Bluest Eye", the Penguin Group, 1994, p. 189-190. 大社淑子訳『青い眼がほしい』早川書房, 1994年, 215頁。
- (注3) *ibid.*, p. 5. 前掲書 8頁。
- (注4) *ibid.*, p. 206. 前掲書 238頁。
- (注5) ここで疑問として残ることがある。それはもし黒人としての一体感が感じられる共同体だったなら、父の子を身ごもった少女に対して、住民はあたたかく接しただろうかということだ。これもモリスンの共同体観を考える上で見逃せない点だ。この小論では立ち入ることはできないが、わずかながら言及するなら、モリスンの第2作である『スーラ』では、性行動を含め奔放な生き方をする女性スーラを、黒人共同体の住民が一丸となって悪人扱いする物語が展開されている。性のタブーを犯す者に対しては、どのような共同体でも、もっとも容赦のない評価を下すと言えるかもしれない。
- (注6) Toni Morrison, "Beloved", the Penguin Group, 1988, p. 88. 吉田亜子訳

『ピラウド』上, 集英社, 1990年, 172頁。

- (注7) 1850年に制定された逃亡奴隷法によると、「北部に逃れてきた奴隷はつかまえて南部のもとの所有者に引き渡さねばならぬ」だった。荒このみ『黒人のアメリカ』筑摩書房, 1997年, 148頁参照。なお, 自由州と奴隷州との併存が『ハックルベリーフィン』の前提になっていることは周知の通り。
- (注8) 加藤恒彦氏は『トニ・モリスンの世界』(世界思想社, 1997年, 157頁)において, ピラウドが亡霊ではなく, 赤の他人で生身の人間だというエリザベス・B・ハウスの説を紹介している。しかし読者は, ピラウドが出現する直前までのセスの家の数々の不気味な出来事を読んでいるので, 不可解なところの多いピラウドを亡霊と受けとめて当然だろう。とはいえ, よく読むとピラウドが生身の人間であることを完全に否定することはできない。つまり, 読む者には亡霊と思わせておいて, 実は生身の人間とも読めるように書かれているのであり, モリスンはマジック・リアリズムすれすれの, しかし現実から遊離しない物語を創造したと言える。
- (注9) 大社淑子氏は『トニ・モリソン 創造と解放の文学』(平凡社, 1996年, 198頁)において, 『ピラウド』のこの共同体の祈りの場面は「黒人の共同体にかけた作者の期待の大きさを示しているのではないだろうか。」と述べている。
- (注10) Toni Morrison, “Jazz”, the Penguin Group, 1993, p. 4. 大社淑子訳『ジャズ』早川書房, 1994年, 8頁。

A STUDY OF BLACK AMERICAN COMMUNITIES IN TONI MORRISON'S NOVELS

Mariko Ota

In this paper are discussed some characteristics of Black American communities which are the main elements in Morrison's novels. In "The Bluest Eye" (1970), "Beloved" (1987) and "Jazz" (1992), women in each Black American community try to help their neighbors who are in serious trouble. But there are some differences in the roles of the communities in those three novels. By researching the differences, we can see that Morrison's idea of the community has developed and that she has come to trust the relationships among members of the community.